

クラーク先生の時代



William Smith Clark, PhD 1826-1886

志賀 武

クラーク先生の時代 (その1)

志賀 武

クラーク先生(William Smith Clark, PhD 1826-1886)といえばBoys Be Ambitious. 「少年よ、大志を抱け」(以下BBAとす①)の言葉とともに日本人ならだれもが知っている明治維新の偉人、恩人であります。札幌農学校(北海道大学の前身)の初代学長として、多くの人材を育て、外交官、高級官僚はもちろんのこと、感化された人々の多くが以後の日本の発展に多大に貢献した教育者、学者、実業家、独立農業家、宗教家となったこともご存知のことでしょう。また小生のように凡俗ながらこの言葉に夢を与えてもらいつつも、心中そのまま温存した人々は星のごとくあるに違いないでしょう。

今回意外なことから畏友K氏にヒントを与えられ、本文を寄稿することができました。この偉人に対して私が知っていたつもりの多くの誤解はおそらく読者諸兄姉と共有する点も多いことと感じ、拙文としましたが、なおさらなる誤りを恐れる次第です。

私も文中でClark博士と呼ぶよりも教育者として重要視したいので先生と呼ばせてもらいますが、ご存知のとおり先生はこのとき50歳、1876年(明治9年)からわずか8ヶ月間の教育をされました。職名は自らもPresidentと表明し皆も学長として尊敬していましたが、当時の制度上では校長は官吏某とされ、先生は教頭となっています。これでは失礼であり、そのためか後世では地質学者、植物動物学者として“クラークはかせ”と尊称している人々が多いのでしょうか。

またご自身が設立したアマースト(Amherst)農業大学の現学長であったため、1年間の特別休暇(これは未確認ですが現国内研究者が渴望して未だに獲得できない長期有給休暇sabbatical leave制度がすでに米国にあったのでしょうか。)を得て二人の教員を従えて来日し、また厳格にも遅滞なく帰国されたためです。この理由は後述します②。私自身もわずか数年ですが授業を持つことがありましたが、学生の数人にさえ何かを残せたかを考え比べると、その影響力は巨大にして奇跡的であります。

なぜかとも短期間に先生は影響力を爆発させ得たのが、小生の疑問の1つであります③。もうひとつはなぜ多くの学生たちが従順に感化され成長し、しかも多方面で大成できたかです④。またひとつはいったい誰がこの偉大なる人物を連れてきたのかであります⑤。

①まずBBAと「馬上の訓言」について: BBAは永らく冒頭のメッセージのまま記憶され、北大校内と札幌市郊外南部の羊ヶ丘公園に銅像とともにこの銘板が示されています。この言葉は、先生がいよいよ帰国される時、学生など総勢25名(一期生はこのときすでにわずか16名のはずですが、馬上26人の勢揃いの記念写真がある)が吹雪の中をどこまでも馬で付いてくるので(馬術も訓練されたのだ)、途中10kmあまりで休憩されたときの別れの言葉とされています。

BBAは本当はBoys, be ambitious like this old man!と言われたようで、「学生の諸君、わしのように意欲的に 頑張るんだぞ!」(句点に注意)の意味が近いと小生は思います。like this old manも色々に解釈できます。これが名句「馬上の訓言」として讃えられ、ちょうど名画「シェーン」のエンディングのように、「ひと鞭入れてさっそうといざ去り行かん!」と劇画風にも伝えられていますが、馬上から偉そうに言う場面のはずもなく、厳寒地での筆記録は困難でしたでしょうし、しかも録音機などはないのですが、この冠頭句は間違いないそうです。

ではなぜこの言葉が今なお生きているかです。それは1、2期生(または4期生まで)の学生が、今で言えばものすごいIQ少年たちの集まりであったようなのです。彼らはなんと16~19歳で全国から入学してきたのです。厳しい授業環境の結果、一期生卒業者は入学25名中13名と記録されています。そのうち数名のその日の日記にはそれぞれ表現が若干異なるがBBAを確かに話されたことと記しています。特に、後に当農学校教授、旧制甲府中学校長、漢字音韻学者となった大島正健はこのとき17歳にしてすでに英語に完熟し、しかもこの状況を「青年奮起立

功名、馬上遺言籠熱誠・・云々」と見事な漢詩で記録したため「馬上の訓言」として後世によく伝わったものと考えられます。また卒業生のいく人もが母校教授となりましたが、再び「BBA運動」を興してこれを教育の要としたのは当学校が廃校の危機を脱し、1892年官制学校として安定し1918年帝国大学となった以降だそうです。

しかし戦前に米人を尊敬し続けることが如何に困難であったかは想像に難くありません。

大島校長は札幌時代のこれらの逸話を各地で繰り返し口演されたようですが、Clark先生の遺志を受け継いだ優れた教育者の一人とされています。さらには甲府中学卒業生の石橋湛山（1956年総理大臣、自由主義者）が孫弟子として活躍し、母校にBBAを揮毫掲額するなど、全国に伝搬させていったのでしょう。私もBBAとエルムの梢に憧れた一人ですが学力の関係？で入学は取りやめました。

しかるに私自身が高校生時代からどうしても引っかかる言葉はambitiousであります。この言葉は辞書的には「野望、野心的な」あるいは「大げさな」など米人からもあまり良い意味には使わないと聞かされながら、この言葉がかくも賞賛されたのはなぜなのか、また逆にこれが彼と彼の教え子らを非難中傷する材料に利用される時代にも隠されなかったのはなぜかでありました。

ところが先日K氏よりBBAは下記の英文が全文である旨の口演を聞いたぞ、との連絡を受け驚愕歓喜しました。すなわち“Boys, be ambitious. Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be.

(少年よ、大志を抱け。お金のためではなく、私欲のためでもなく、名声という空虚な志のためでもなく、人はいかにあるべきか、その道をまっとうするために大志を抱け。) 北海道大学図書館報『榆蔭』No.29よりとの由。これを読むと、真理に近く、なるほどそういう意味かと膝を打った次第だったのです。しかし感激して間もなく、これも真実ではないのではないかとの情報が入りました。

(つづく



William Smith Clark, PhD 1826-1886

その(1)で **Boys Be Ambitious**. 「少年よ、大志を抱け」(以下 **BBA** とする①)には後半部の言葉があったのではとか、原文の真意についても諸説があることを紹介しました。

ところが信頼できる資料を調べていくと、その日の場面では前述のような言葉は付加されなかったようなのです。学生の毎日は英語漬けではありましたが、それでも大半が初学者の彼らには上述の言葉は難解すぎる英文でしょう。ひょっとすると **Clark** 先生は日頃から冠頭の **BBA** を繰り返し学生に伝え、暗唱させ、その都度後半部を聖書などから引用して様々に付け加えて伝授したのかもしれませんが。

一方もう少し信頼すべき資料が見つかりました。それは 1915 年米国国際博覧会に日米間の特記すべき交流記事を掲載する際、北海道開拓史を紹介する上で **BBA** だけでは米国人にさえも誤解されやすいとの配慮から注釈的に付加されたとの意見であります。

つづく。

クラーク先生の時代 (その3)

志賀 武

実は前回まで説明してきた内容の中心は大島正健、同正満、同智夫共著の「クラーク先生とその弟子」(教文館)に因っています。当然読者からは「なーんだ、受け売りの要約か」と思われるでしょう。しかしこれには深い事実と事情があると感じざるを得なかったからであります。それ故、本投稿を始めるにつれてだんだんと文章と説明が長くなることを心配しています。

まず本原著はその(1)で触れた一期生大島正健による1937年(昭和12年)著です。以後1947年ご子息正満氏による病床での聞き取り、1958年同改編、さらにこれを1993年孫の智夫氏があらゆる資料を検討し矛盾点の解明、訂正、改良を加えられて1993年装丁を一新作成され、今小生が手にしているのは1998年の増補版であります。これ以上の信頼できる資料は見つからないためです。小誌を一瞥され、さらに関心が高まれば是非上記の著書をお読みいただくことは小生の願いでもあるからです。

つづく。

② なぜ先生は遅滞なくわずか8ヶ月で帰国されたか。

これも諸説ありますが、なんと言っても前述の通り、ご自身が設立したマサチューセッツ州立アマースト (Amhurst) 農業大学の現学長であったため、当然そちらも気がかりであったでしょうし、時間的余裕が許されなかったのでしょう。また後に触れる、「紳士は約束を厳守する」というピュリタン精神を学生に示すため帰国厳守を実行されたのでしょう。

そしてあまり知られていないことですが、同行してきた二人の教授が優秀で学生にも尊敬されており、彼らに後を心配なく委ねられたのではないかということです。

ペンハーロウ教授は後任の学長となり、またホイラー教授は先生の帰国後の翌年 (明治) には当時まだ未開地であった石狩川奥地を、学生らを引き連れて大探検旅行を举行し、これらの貴重な地理学、地質学、生物学、鉱山学的資料が数年を待たず北海道石炭の炭田開発事業を本格化させたとのこと。もし今の時代に未成年の学生をヒグマも恐れぬ決死の丸木船やカヌーでの探検に同行させたらおそらく非難ごうごうでしょう。

案内は当然アイヌ人が同行しましたが、当時としてはまだ学生側に現地人への差別意識が強く、日記などにその表現が残っています。しかし教授らはアイヌの勇敢さや人物を明確に評価して賞賛しました。この点でも士族階級出身の多い学生に人種平等の目を開かせています。

③ なぜかくも短期間に先生は影響力を爆発させ得たか? “Be gentleman.”

当然ですが Clark 先生は BBA だけでなく、種々の警句を述べられたに違いありません。これもあまり知られていないことですが、学生に対して当初から一貫して厳しく求めた言葉は BBA よりもはるかに重要な言葉がありました。“Be gentleman.” 「常に紳士たれ」です。

ご存知でしたか? 英句として簡単で当たり前すぎて BBA 程のインパクトは感じられませんよね。でもたったこの 11 文字が、先生が最初に示された言葉であり、むしろバックボーンであり、これが教育の全てであったと後年語られています。

今、改めて真の紳士とは、その資格、位置付けはと問われて正確に答えられるでしょうか? またそれぞれ読者の考え方で違いが大きいことも当然です。

先生は“Be gentleman.” を常に学生に問われ議論されたそうです。

Gentleman はまさに「武士道」と一脈通じます。ご存知の通り二期生太田稲造 (後年新渡戸姓に移籍) が後年の名著となる「Bushido」を米国人をも感嘆する崇高なる英文論文で発表したのは、ここに源があったのです。小生も邦文解説付きの「Bushido」を書店で立ち読みしましたが、難しすぎるのでそっと書棚に戻しました。

(その5に つづく)

しかし血気旺盛ながら精神未熟な学生にこの言葉“Be gentleman.” 「常に紳士たれ」を植え付けるにはもう一つの道具が必要でした。それは基督教と聖書の授業への導入でした。

官費学校（学生は給料支給、卒業後は中級官吏として就職保証付きなのです）に西洋の基督教しかも主流とはいえない清教徒教育を、学長の独断で導入することがどうして許されたのでしょうか。また学生達がそう易々と異教を受け入れられたのは全く不思議ではありません。その理由とは？

その理由は次の二つの疑問点と関連して推察すべきでしょう。

二つの疑問点すなわち、

① なぜ多くの学生たちが従順に基督教に感化され成長し、しかも多方面で大成できたか。

② 誰がこの偉大なる人物を連れてきたのか。を合わせて解明していきたいと思います。それには地理的、時代的背景に注目しなければなりません。

地理的時代的背景：幕末期からすでに欧米列強からの開国を迫られていたのですが、最大の脅威はロシアでありました。南は対馬海峡、北は千島どころか津軽海峡さえも欧州最強のバルチック艦隊の遊弋に脅かされ、領土侵略の脅威はすでに清国、朝鮮の悲劇が現実化していました。また地下資源の開発、特に石炭は当時の重要な船舶、産業燃料であり、北海道の資源開拓は明治新政府にとって大規模農業技術の獲得とともに最重要点でありました。しかしそれと同時に国土防衛上この激寒地に対露要衝として都市を造り住民を定着させることがより大きな狙いでした。

この全てを習熟させ得る学校として札幌仮農学校がまず東京に設立され、有能かつ質実剛健な学生を厚遇で募集したのです。札幌への移動支度金は制服と金拾圓だったとのことで、今で言えば多分 20 万円以上にもなるでしょう。このとき初代開拓庁長官に任命されたのが薩摩閥の剛胆なる軍人黒田清隆でした。彼の就任が北海道開拓を成功させた全ての源であると小生は強く想っています。

黒田は米国を視察し、荒涼たるこの北地を開拓するには、西部開拓を成功しつつあった新興国の米国を模範とすべきことを確信し、教員の人選を対米吉田公使に依頼しました。

吉田は人選に悩み、これを Clark 学長に求めました。人選は難航し困った金子は Clark 学長に面接し、冗談のつもりで、それでは学長自ら来られては、と言ったところ、「ヨシ、行こう」と即断されたのだそうです。

Clark 先生はドイツにも留学し、学位を得られているので、当時ドイツ留学閥が強かった政府、閣僚達をも同意させやすかったに違いありません。（その6に つづく）

さて□□なぜ多くの学生たちが従順に基督教に感化されたか。です。

黒田の偉いところは Clark 先生や学生らにとっても苦しい海路での函館—札幌行きに同行し協力していることです。汽船があまりに小さいため航海は楽ではなかったと記録されていますが、航海中すぐに Clark 先生は“**Be gentleman.**” 紳士たるべき **禁酒禁煙**、一高生に代表されるような**弊衣破帽、高歌吟唱**を禁止するとともに、教科に基督教と聖書を使用することを黒田に説得同意させました。

黒田は当初驚き反論しましたが、貴殿がいかなる方法によっても私に全てを任せるなら学校教育を成功させると互いに約束したのではないかと迫りました。今時の役人、大臣であればまず保身のために拒絶し反故にするでしょうが、黒田は**サムライ**です。そして Clark 先生も何とかつては**勇敢なる軍人（北軍大佐）**だったのです。

この二人が肝胆相照らす会話を重ね相互理解を深めるのに船旅は絶好でありました。

黒田は文武両道の薩摩の人であります。Clark 先生もまた文武両道の間人形成にうまく基督教的教育を導入し、その成果と成長が著しいことを確認した黒田はこれを黙認することにしました。体育は実戦的兵式、時には野球をも取り入れ、室内の座学よりも野外活動を優先奨励し体力強化を行いました。

講義は北海道開拓に関わるいっさいの学問、測量、農学、畜産学、生物学、鉱物化石学、土木工学、等々だったと言われています。もちろん英語で、しかも日本人に苦手とされる**弁舌討論**すなわち**ディベート**に力が注がれたため、多くの卒業生が海外で活躍するのに大いに役立ったのです。現在でも国際社会でますます日本の存在感が薄くなっているのは外交ニュースでご覧の通りですが、隣国の国連大使の活躍？を見るにつけ**ディベート力**が極めて重要となりつつあることを文科省は早く気付いて欲しいものです。人と争うことを避けるのはもはや美德ではなくなっているのですが。（その7に つづく）

*参考

J D A 日本ディベート協会 Japan Debate Association
(<http://www.kt.rim.or.jp/~jda/intro/intro1.htm>)

一頁で「馬上の訓言」について述べましたが、聖書に触れたことのある方であれば、これでハハーンとお気付きになると思います。そうです、マタイ伝第五章「山上の垂訓」を文字っているのです。ここではあまり基督教に触れませんが、毎日曜の礼拝や聖書音読、聖書からの頻繁な警句の引用は英語学習に不可欠であったでありましょうし、熱心な清教徒教師の指導のもと、極北の地での禁欲生活の上に厳しい学習と過酷な自然環境はたちまち純真な若い学生達の心をとらえ、熱心な基督的生活者となり、二期生の内村鑑三、内田漣を含め多くの学生が洗礼を受けました。かれらの功績は以後外国人牧師に頼らない独立した日本基督教会の礎を築いたことです。

しかし卒業生からは基督者だけでなく、岩崎岳東のような国粹主義者も生まれれば、佐藤昌介（後学長）、宮部金吾（植物学の祖）高木玉太郎（化学）広井勇（土木）などの学者や指導者を輩出しました。

現在まで我が国の英語の達人に三傑ありと言われ（薄ペラペラ人でない）、そのうちの二人が農学校出身の前述の太田と内村と言われていますが（後一人は岡倉天心）、どれほど勉強をしたのでしょうか。

またまた自論で恐縮ですが、彼らの努力もさることながら、やはりそれまでの幼少からの漢詩漢文の素読にあったのではと思ひ当たるのです。「やまとことば」をまず詩作し、全く異なる言語文法である漢文に変換作成し、推敲を重ねるのは全く英作文と同じではありませんか。

多くの明治人が苦学の末、欧米に留学し、差別され、苦勞しそれでもあらゆる分野で驚くべき業績を上げ得たのは、やはり言語的基礎学力であろうと考えられるのです。

お茶の間留学では結果は明白ですよ。

今、十七才の大島正健作「馬上の訓言」の全文をここに挙げて私を含め、その感動を読み取ることは現代人にはできないことでしょう（全文を知りたい方はご一報ください）。

横道にそれますが司馬遼太郎の「坂の上の雲」のなかで、私とはたまたま同姓というだけですが四期生の志賀重昂も歴史学者とされていますが漢籍に詳しく、日露戦争の旅順陥落時に、乃木将軍の漢詩を添削し、本人をして未だ無学なりと嘆かわしめています。すごいですね。何かしらの自慢話ではありますが。（その8 につづく）

さて Clark 先生はかつて華々しい戦績の軍人でしたが、部下を多く死なせたため将官昇進を固辞したと記録されています。一方黒田も後年尊敬する先輩の西郷隆盛を追誅しなければならなくなったことは、まことに米国の南北戦争の Clark 大佐、我が国の西南戦争の黒田中将と、対比する過酷な歴史の皮肉事となりました。

またまた自論ですが、もう一つの黒田の功績は当時絶対的権力者であった明治大帝に北海道への行幸を具申したことです。

帝もまだ危険であった未開の北海道に程なく遠征し（明治14年）、農学校を視察し、しかも馬上の訓言の地に休息され足跡碑を記されたことです。これは賞賛を無言で示されたことになり、これで何人も農学校の業績を否定揶揄できなくなったのではないのでしょうか。

残念なことは Clark 先生ご自身が帰国されてから、晩年あまり恵まれず、一大事業も失敗に終わり、10 年を待たず亡くなられたことです。まさに燃え尽きたとでも言うべき生涯でしたが、帰国後も文通での指導を惜しまず、教え子が教会を設立する時には寄付金を送るなど、日本人生徒の成長を誇りにしていたことは魅力の大きい人でした。

明治の人々は洋の東西を問わず、深謀遠慮、威風堂々どうしてみんなこんなに偉かったのでしょうか。

了